

ある本を読んで思ったこと

「の品格」といった本が続々と出版され、ベストセラーになっているが、先日、『会社の品格』という新書を読んだ。多くの人が日常的に接する機会の多い「会社」というものに焦点をあて、そこからより良い世の中になっていくことを目指している本であり、なかなか興味深い内容であった。ここ数年、食品偽装や度重なる会社の不祥事などが頻繁に起きており、社会の感覚から随分と離れてしまったような信じられない活動をしていたような会社もあり驚くことも度々であったが、この本を通じて今まであまりじっくりと考えることがなかった「会社」といった仕組みを見つめ直す良い機会になった。

「会社」というと皆さんにとってはまだちょっと遠い存在かもしれないが、現在直接的ではなくても買い物などを通して会社というものに触れているであろうし、将来かわりがでてくる存在であろう。また、この本の中で紹介されている仕事の使命感について語るによく用いられるという次の逸話は、何かに取り組む際の心構えといった視点で読みかえることもできると思われる。[あるとき街を歩いていた旅人が、石を積んでいた職人に聞きました。「あなたは何をしていますか」と。すると職人は答えました。「見ればわかるだろう。石を積んでいるのだ」と。ところが旅人は、もう少し歩いて、同じように石を積んでいるもう一人の職人に同じ質問を試み

ました。すると、その職人はこう答えたのです。「私は教会を造っているのです」と] 客観的には同じ石を積むという仕事をしている職人がより仕事にやりがいと誇りを感じている方はどちらでしょうか。当然それは後者でしょう。この逸話では同じ仕事をしていてもその目的を意識できるかどうかで随分と差が出てくるものであり、自分の仕事が石を積むというレベルではなく、教会を造っているのだというレベルで再解釈できる状況を作ることができれば、人々は使命感をもって仕事ができるようになる、ということを暗示しているのである。皆さんにとっても、例えば勉強やスポーツ、趣味の世界といった場面でもただ目の前のことに取り組むというだけでなく、それをする事で本当は何を目的としているのであろうかと改めて見直すと新たな気持ちで取り組むことができるかもしれないと思う。そういえば、なぜ小・中学校で勉強をしなければならないかといった質問を親にぶついたら「考える力をつけるためだよ」と教えられたと、話してくれた知人がいた。私ももっと若い頃にそんな捉え方ができていたらもうちょっとまじめに勉強したのかもしれないと、今さらながら思ったりもするが、目的を見失わない捉え方ができたら素敵だなと思う。

小笹芳央(2007) :

「会社の品格」 幻冬舎新書

